『オリエント』第58巻第1号抜刷
2015年9月30日発行

『ウルク予言』裏面8行の五つの KIMIN をめぐって

杉 江 拓 磨

2 0 1 5

日本オリエント学会

『ウルク予言』裏面 8 行の五つの KIMIN をめぐって

An Attempt to Interpret the Fivefold KIMIN
in the Uruk Prophecy, Reverse Line 8杉 江 拓 磨^{*}
SUGIE Takuma

ABSTRACT The reverse of the Uruk Prophecy (W 22307/7) predicts a series of unnamed kings and highlights the removal and the later return of “the protective goddess of Uruk.” It is widely accepted that the second king, who will remove the goddess, and the next-to-last one, who will return her, should be identified with Nabu-šuma-iškun and Nebuchadnezzar II respectively, on the basis of other historical sources. There is, however, no consensus about the identification of the kings in between. When addressing this issue, the question of how to interpret the repetition sign KIMIN, which is written five times in line 8, must first be resolved, because on it depends the answer to the question of how many kings are mentioned on the reverse.

Given that the surviving exemplar of the text is presumed to date to the Achaemenid period, this article proposes the following hypotheses: (1) The fivefold KIMIN indicates a succession of five kings, and so the reverse of the text refers to eleven kings in total; (2) the fivefold KIMIN was not in the original text, but the result of an Achaemenid alteration; (3) the copyist re-identified king 2 with Nabonidus, who gathered the statues of Babylonian deities, including Ištar of Uruk, to Babylon; and (4) the copyist replaced the repetition of the same phrase describing a reign of a wicked king with a sequence of the iterative sign KIMIN and changed (probably reduced) the number of reigns by adjusting that of KIMIN in order that kings 3-9 would be identified with Cyrus II, Cambyses II, Darius I, Xerxes I, Artaxerxes I, Darius II and Artaxerxes II. Thus, the successor to Artaxerxes II (i.e. king 10) would be the one who would arise in Uruk and restore the city as well as its goddess. If these hypotheses are correct, the Uruk Prophecy was updated during Artaxerxes II's reign to foretell that soon the Achaemenid domination would end and a native Urukæan dynasty be founded.

I. はじめに

1969年にウルク（現代名ワルカ）で発見された1枚の粘土板（発掘番号 W 22307/7）は、表裏両面にわたり楔形文字が刻まれている。このうち、破損が著しい表面は措くとして、裏面は相次ぐ王たちの登場を実名を伏せて予言するものとなっていることから、この文書は『ウルク預言』と呼ばれてきた。もっとも、それは、預言者が語った神託を記録したものでなく、むしろ、未来を言い当てる予言書として創作された作品であると考えられる。それゆえ、本稿では、この文書を『ウルク予言』と呼ぶ。⁽¹⁾

この文書の裏面の内容は、後述するように、予言の体裁を取っているものの、実際の歴史上の事件について婉曲に語る部分（いわゆる「事後予言」）を含むと思われる、その事件の特定が幾度も試みられて

* 日本学術振興会特別研究員 PD

Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Science

(1) 『ウルク予言』の手写図は、Hunger 1976, 124 no. 3 を、翻字・翻訳・注からなる校定本文は、Hunger & Kaufman 1975; Hunger 1976, 21-23 no. 3 を、裏面の写真は Schmidt et al. 1972, pl. 25g をそれぞれ参照。裏面のみであるが、邦訳が月本 2010, 295に見られる。

きた。その際、議論を呼ぶのが裏面の途中に五つ続けて記される繰り返し記号 KIMIN である。というのも、この文字は、直前の文辞が繰り返されることを意味するが、五つ続いた KIMIN 全体が具体的にどの文言を表すのか、ひいては、それが何人の王に関する予言として読まれるかによって、文書に登場する王の比定が左右されるからである。

本稿はこの問題に関する従来の仮説を批判的に検討した上で、新たな仮説を提示する。

II. 『ウルク予言』裏面の内容

議論の前提として『ウルク予言』裏面の全文を翻字と翻訳により以下に示す（翻訳中の【王 N】は、後の議論を分かりやすくするために付した見出し）。

- (1) [...] 「ZI」-am-ma sap-ḥa-a-ta KUR i-bé-e [I] (2) [...] 「LUGAL」 šá iš-tu¹ qé-reb KUR tam-tim šá ina qé-reb ŠU.AN.NA^{ki} DÙ-šú be-lu-ú-tu
- (3) [EGI]R-šú LUGAL E₁₁-ma di-i-ni KUR ul i-da-a-nu EŠ.BAR KUR ul KUD-as (4) [d]LAMMA UNUG^{ki} da-ri-tum iš-tu qé-reb TIR.AN.NA^{ki} ib-bak-ma ina qé-reb ŠU.AN.NA^{ki} ú-še-eš-šib (5) [I]a dLAMMA UNUG^{ki} ina BÁRA-šú ú-še-eš-šeb la UN.MEŠ-šú a-na NÍG.BA i-qa-áš-su (6) UN.MEŠ ša UNUG^{ki} bil-ti ka-bit-ti im-mid UNUG^{ki} ú-ḥar-rab ÍD.MEŠ sa-ki-ki ú-mál-lu (7a) GARIM.MEŠ ŠUB-di (7b) EGIR-šú LUGAL E₁₁-ma di-i-ni KUR ul i-da-a-nu EŠ.BAR KUR ul KUD-as
- (8) KIMIN KIMIN KIMIN KIMIN KIMIN bu-še-e KUR URI^{ki} a-na KUR SU.BIR^{4ki} TI-qé
- (9) EGIR-šú LUGAL E₁₁-ma di-i-ni KUR ul i-da-a-nu EŠ.BAR KUR ul KUD-as (10) kib-ra-a-ti er-bet-ti i-bé-el a-na šu-mi-šú kib-rat i-nu-uš-šú
- (11) EGIR-šú LUGAL ina qé-reb TIR.AN.NA^{ki} E₁₁-ma di-i-ni KUR i-da-a-nu EŠ.BAR KUR KUD-as
- (12) GARZA d a-nu-ú-tu ina qé-reb TIR.AN.NA^{ki} ú-ka-a-nu (13) dLAMMA UNUG^{ki} da-ri-ti iš-tu qé-reb ŠU.AN.NA^{ki} ib-ba-kam-ma ina qé-reb TIR.AN.NA^{ki} ina BÁRA-šú (14) ú-še-eš-šib UN.MEŠ-šú a-na NÍG.BA i-qa-áš-su É.KUR.MEŠ šá UNUG^{ki} DÙ-uš É.MEŠ DINGIR.MEŠ ana KI-ši-na GUR-ár (15) UNUG^{ki} ud-da-áš KÁ.GAL.MEŠ UNUG^{ki} šá^{na4} ZA.GIN DÙ-uš ÍD.MEŠ GARIM.MEŠ tuḥ-du u HÉ.GÁL ú-mál-li
- (16) [E]GIR-šú LUGAL DUMU-šú ina qé-reb TIR.AN.NA^{ki} E₁₁-ma kib-rat er-bet-ti i-bé-el (17) [EN²]-ú-tu ù LUGAL-ú-tu ina qé-reb TIR.AN.NA^{ki} DÙ-uš a-di ul-la BALA-šú i-ka-a-nu
- (18) [LUGAL.M]EŠ ša UNUG^{ki} ki-ma DINGIR.MEŠ ip-pu-šú be-lu-ú-tu

【王 1】(1) [……] 彼は立ち上がって国の散らされた民を支配する。(2) [……] バビロンの中で支配権を行使する「海の国」出身の【王(?)】。

【王 2】(3) 彼の【後】に王が現れるが、国に裁きを示さず、国に決定を下さない。(4) 彼は永遠なるウルクの守護女神をウルクの中から連れ去り、バビロンの中に住まわせる。(5) 彼はウルクの守護女神【でな】いものを彼女の祭壇に住まわせ、彼女の民でない人々を捧げ物として彼女に捧げる。(6) 彼はウルクの民に重い貢納を課し、ウルクを荒廃させ、(各地の)川を泥で満たす。(7a) 彼は耕地を放棄する。

【王 3】(7b) 彼の後に王が現れるが、国に裁きを示さず、国に決定を下さない。

【王 4】—【王 8】⁽²⁾(8) 同前・同前・同前・同前・同前 彼はアッカドの国の所有物をスバルトゥ

の国へ取っていく。

【王9】(9) 彼の後に王が現れるが、国に裁きを示さず、国に決定を下さない。(10) 彼は四方世界を支配する。世界は彼の名におののく。

【王10】(11) 彼の後に王がウルクの中に現れ、国に裁きを示し、国に決定を下す。(12) 彼はアヌ神にふさわしい典礼をウルクの中に確立する。(13) 彼は永遠なるウルクの守護女神をバビロンの中から連れ去り、ウルクの中にある彼女の祭壇に(14) 住ませ、彼女の民を捧げ物として彼女に捧げる。彼はウルクの諸神殿を建て、神々の家々を元どおりに戻す。(15) 彼はウルクを新たに、ラピスラズリでできたウルク(各所)の門を建て、川や耕地を豊穡で満たす。

【王11】(16) 彼の後に彼の子である王がウルクの中に現れ、四方世界を支配する。(17) 彼は「支配」権と王権をウルクの中で行使し、彼の治世はとこしえに確かである。

(18) ウルクの「王た」ちは神々のように支配権を行使する。

裏面を一読すると、二つの対照を容易に見て取ることができる。一つは、次々に現れる王が「国に裁きを示さず、国に決定を下さない」という否定的な評価を受ける者(【王2】、【王3】、【王9】)と、逆に「国に裁きを示し、国に決定を下す」という肯定的な評価を受ける者(【王10】)とに二極化されていることである。

もう一つの対照は、「ウルクの守護女神」をウルクからバビロンへ連れ出す【王2】と、同じ神をバビロンからウルクへ連れ戻す【王10】との間に認められる。そして、一つ目の王に対する両極端の評価とも併せて考えると、否定的に評価されるのは、この「守護女神」をウルクから離れさせる、あるいは、その離れた状態のまま放置する王であり、肯定的に評価されるのは、この神をウルクに戻す王であるといえる。このことから、『ウルク予言』の裏面は、「ウルクの守護女神」がこの町を離れる期間を暗黒時代として描きつつ、その惨状が「ウルクの中に現れる」(裏面11行)【王10】により一変され、彼の子孫(【王11】および18行の「ウルクの王たち」)がウルクから全世界を支配することを予言するものであると要約することができるであろう。

III. 歴史的解釈と成立年代の推定

『ウルク予言』の裏面に名指しされずに登場する王たちについては、これまでにさまざまな比定が提案されているが、そのうち、最初のものにして、今なお強い影響力をもつのは、文書の校定者であるフンガーと連名でカウフマンが発表したものである。⁽³⁾ カウフマンが最初に注目したのは、上の翻訳に付した見出しでいう【王10】により「ウルクの守護女神」がこの町に取り戻されるという予言である。この予言を彷彿とさせる、くだりがネブカドネツァル2世(在位前604-562年)の碑文に見られる。そこで、この王がエアンナ神殿を再建し、そこに祀られるイシュタル女神像を修復し、「エアンナに慈悲ある守護女神を帰らせた (*ana é-an-na lamassa ša damiqtim utēr*)」と記される (Langdon 1912, 92 Nebukadnezar no.9 ii 50-55)。⁽⁴⁾ ここからカウフマンは、『ウルク予言』が問題とする「ウルクの守護女

(2) ここでは、とりあえず裏面8行冒頭に五つ続く KIMIN (「同前」) を5人の王の登場を意味すると解した。この五つの KIMIN の解釈について詳しくは、III-IV 節を参照。

(3) Hunger & Kaufman 1975, 373-375. そこでの本文の校定を超えた議論をフンガーはカウフマンに帰している (Hunger 1976, 21)。それゆえ、上掲論文で展開される『ウルク予言』裏面の歴史的解釈は、カウフマン独りによるものとして扱う。

神」とはエアンナに祀られるイシュタルのことであり、この女神をウルクへ帰らせ、町を復興する【王10】はネブカドネツァル2世を表すと解する。

このときのイシュタル神の帰還に対する言及は、ネブカドネツァルの名は残っていないものの、ナボニドス（在位前555-39年）の碑文にも認められる（Schaudig 2001, 517 3.3^a iii 11'-39'）。そこではさらに、ウルクからイシュタル像が持ち出されたのは、エリバ・マルドゥク時代（前8世紀前半）のこととされる。この記述をもとにカウフマンは、「ウルクの守護女神」をウルクから取り去る【王2】はエリバ・マルドゥクを指すと推定する。

次に【王2】と【王10】の間にはさまれた時代に目を移すと、判断に迷うのは、裏面8行の冒頭に現れる五つの繰り返し記号 KIMIN の解釈である。カウフマンは、この五つの KIMIN 全体で（1）一人の王が先王と同じ数々の行動を取る、（2）同じような王が5人現れる、（3）不特定多数の同様の王が出現する、のいずれかを表すと考える。【王2】をエリバ・マルドゥク、【王10】をネブカドネツァル2世と解するカウフマンは、両者の間に200年近い隔たりがあることから、（3）の案を採る。その上で、五つの KIMIN に続いて、バビロニア（「アッカドの国」）の富がアッシリア（「スパルトウの国」）へ持ち去られると述べられることから、この8行全体で、ティグラト・ピレセル3世（在位前728-27年）以来、アッシリアが長くバビロニアを支配した時代を表現すると受け取る。カウフマンによれば、これと【王10】との間に位置する「四方世界を支配する」【王9】は、ネブカドネツァル2世の父で、新バビロニア帝国の建設者であるナボポラッサル（在位前625-05年）とされる。そして、ウルクを復興する【王10】の子で、永遠の支配を確立する【王11】は、ネブカドネツァルの子のアメル・マルドゥク（在位前562-60年）を指すとされる。こうしてカウフマンは『ウルク予言』を、おそらくネリグリッサル（在位前559-56年）と王位をめぐり競合していたアメル・マルドゥクを支援する目的で、彼の短い治世あるいは父王との共同統治期間に著された文書であると理解する。

なお、「ウルクの守護女神」をウルクから連れ出す【王2】の比定に関しては、コールによりカウフマンの所説に修正が提案されている（Cole 1994, 229 ii 31-38, 242-244）。1988年に新たに発表されたウルクに由来する別の文書の中で、ウルクからのイシュタル女神像の撤去がエリバ・マルドゥクの次の王であるナブー・シュマ・イシュクン（在位760?-48年）の罪業の一つに数えられていることから（von Weiher 1988, 8 no. 58 ii 31-38）、コールは『ウルク予言』裏面の【王2】をナブー・シュマ・イシュクンに、直前の『海の国』出身の【王1】をエリバ・マルドゥクに比する。しかし、そうすると、イシュタル像がエリバ・マルドゥク時代に持ち去られたと明記する上掲のナボニドスの碑文との間に矛盾が生じる。これに関してコールは、問題の出来事はナブー・シュマ・イシュクンが即位前に引き起こしたものであったが、それがやがて彼の在世中のこととして誤解されたものと説明する。

一方、ランバートはカウフマンとまったく別様に『ウルク予言』裏面を解釈しようと試みる（Lambert 1978, 10-12）。ネブカドネツァル2世の碑文が「守護女神（*lamassu*）」だけでなく、「守護神（*šēdu*）」のウルクへの帰還についても語っていることから（Langdon 1912, 92 Nebukadnezar no. 9 ii 53-55）、ランバートは、この王が男女一対の神像をウルクに取り返したと考え、そこにイシュタル女神像が含まれていたか疑問視する。そして、これを理由に、イシュタル像の撤去と回復を軸にするカウフマンの議論を斥ける。

（4）併せて Beaulieu 2003, 129 も参照。

さらに、ランバートは、裏面 8 行冒頭に五つ続けて書かれた KIMIN に対しても独自の見方を示す。彼によれば、KIMIN が連なったものは、その直前に見える一連の複数の語句を表すものであり、『ウルク予言』の五つの KIMIN はそれぞれ (1)「彼の後に (*arkišu*)」、(2)「王が (*šarru*)」、(3)「現れるが (*illâmma*)」、(4)「国に裁きを示さず (*dîni māti ul idânu*)」、(5)「国に決定を下さない (*purussê māti ul iparras*)」を表すとされる。つまり、五つの KIMIN 全体で一人の王（翻訳に付した見出しの【王 4】—【王 8】を一人としたもの）の出現が予言されていることになる。

これをもとにランバートは『ウルク予言』裏面に登場する王たちを彼なりに比定していく。それによると、「海の国」出身の【王 1】はメロダク・バルアダン 2 世（在位前 721-10, 703 年）を、【王 2】、【王 3】、【王 4-8】、【王 9】の 4 人はそれぞれサルゴン 2 世（在位前 709-05 年）、センナケリブ（在位前 704-03, 688-81 年）、エサルハドン（在位前 680-69 年）、アッシュルバニパル（在位前 668 年、アッシリア王として在位前 668-27 年）を指す。そして、ウルクに安寧を取り戻す【王 10】および【王 11】はナボポラッサルとネブカドネツァル 2 世の父子に比される。そこから、『ウルク予言』の成立は、最後の王（【王 11】）であるネブカドネツァル 2 世の時代に帰される。

もっとも、このようなランバートの異論によってカウフマンの所説が覆ることはないと思われる。というのも、ランバートが【王 2】に比定するサルゴン 2 世がイシュタルないし他の女神の像をウルクから取り除いたという事実も、また、【王 10】とされるナボポラッサルが女神像をウルクに戻したという事実も、これまで知られていないからである。むしろ、注目すべきは、『ウルク予言』において「ウルクの守護女神」がウルクから持ち去られた後に「ウルクの守護女神でない (*lā lamassi uruk^{ki}*)」別の女神像が導入されると述べられている（裏面 5 行）ことと、ナボニドスの碑文の中でエリバ・マルドゥク時代にウルクを去ったイシュタルの代わりに「エアンナにふさわしくない守護女神 (*lamassu lā simāt é-an-na*)」が置かれたと記されている（Schaudig 2001, 517 3.3^a iii 27'-29'）こととの符合である。このことから、『ウルク予言』が関心を寄せる「ウルクの守護女神」とは、エリバ・マルドゥクあるいはナブー・シュマ・イシュクンの時代にウルクの町から撤去されたイシュタル女神の像を指すと考えべきであろう⁽⁵⁾。

ただし、カウフマンの議論にも難点がないわけではない。一つは、裏面 8 行の五つの KIMIN の解釈が挙げられるが、それについては次節で検討する。もう一つの問題は、カウフマンがネブカドネツァル 2 世とエリバ・マルドゥクを指すとする【王 10】と【王 11】の父子がともに「ウルクの中に現れる」（裏面 11, 16 行）と述べられていることである。というのも、この二人の王がウルク出身であることを立証するものは、今のところ、確認されていないからである。確かに、近年、ナボポラッサルを祖とする新バビロニア王朝の起源をウルクに求める見方が提案されているものの、それらは確証を欠き、推測の域を出るものでない⁽⁶⁾。それゆえ、【王 10】と【王 11】は現実に王位に即くことはなかったウルクに出

(5) ランバートが問題としたネブカドネツァル 2 世の碑文に言及される *šēdu*（守護神）と *lamassu*（守護女神）の対に関して、ボリュウはこれを、男女二つの顔をもつイシュタルそのもの、または、この女神に随行する霊的存在を表すと解する（Beaulieu 2003, 136-138）。ちなみに、『ウルク予言』の「ウルクの守護女神」をナナヤ女神とし、その像をエラムから奪回したアッシュルバニパルを【王 10】に結び付けるスカーロックの議論（Scurlock 2006）も支持し難い。なぜなら、『ウルク予言』において「ウルクの守護女神」はエラムでなく、バビロンから取り戻されると明記されているからである。

(6) 新バビロニア王朝のウルク起源を唱えるものとして、Beaulieu 1997, 391-393; Jursa 2007 を参照。ユルサは、アッシュルバニパル時代にウルクの知事職にあったクドゥルをナボポラッサルの父と、ナボポラッサル時代初めにエアンナの管長（*šatammu*）の任に就いていたネブカドネツァルまたはクドゥルと呼ばれる人物をナボポラッサル

自をもつ、まったく別の親子を念頭に置いている可能性も考えられる。⁽⁷⁾もしそうであるとすれば、『ウルク予言』は、ナボポラッサルやネブカドネツァルらバビロンの王でなく、ウルクの地元の人間が自ら
の手でイシュタル像を町に取り戻すことを祈念する文書であると捉えられるであろう。あるいは、ナボ
ポラッサルがウルク出身であり、さらに、『ウルク予言』の【王10】に関するくだりを事後予言でなく、
まだ実現しない文字どおりの予言として書かれたものと仮定すれば、これをナボポラッサルと結び付け
ることも不可能でない。⁽⁸⁾

このように『ウルク予言』裏面の【王10】および【王11】が歴史上、どの人物を念頭に置いているか
という問題に、現状では決定的な解答を下すことはできない。とはいえ、この文書の成立は、イシュタ
ル女神像のエアンナへの返還がネブカドネツァル2世によりすでに実現した、もしくは、それに先立ち、
女神像の返還が現実味を帯びてきつつあった新バビロニア王朝時代前期の辺りに位置付けるのが妥当で
あろう。⁽⁹⁾そして、少なくとも「ウルクの守護女神」の帰還はネブカドネツァル2世により現実となった
ものの、ウルクが王を輩出し、世界に君臨する帝都になるとする『ウルク予言』の結末の予言は的中す
ることのないまま、残されたといえる。

IV. 五つの KIMIN の解釈にまつわる問題

以上の議論を踏まえて『ウルク予言』裏面の【王2】を、『ウルク予言』同様、ウルクに由来する文
書の情報を重視して、ナブー・シュマ・イシュクンと、【王10】をナボポラッサルないしネブカドネツ
ァル2世、あるいは、彼らと同時代にウルクで活躍した現在では特定することのできない人物とすると、
8世紀半ばから7世紀末までに現れた多数の王が両者の間に登場するようには読めないという困難にぶ
つかる。そして、それに関連して避けて通ることができないのが、裏面8行の冒頭に五つ続けて書かれ
た KIMIN の解釈である。

まず、この五つの KIMIN がその前後(3, 7, 9行)に頻出する「彼の後に王が現れるが、国に裁きを
示さず、国に決定を下さない」というくだりに何らかの形で関係すると見て、ほぼ間違いはないであ
ろう。⁽¹⁰⁾問題は、カウフマンも述べるとおり、これが(1)上掲の文句1回分を表すのか、それとも(2)5

の子で、後に王になるネブカドネツァル2世のことであると考え。つまり、彼によれば、ナボポラッサルは父の
名である「ネブカドネツァル(Nabû-kudurri-ušur)」(「クドゥル(Kudurru)」はその短縮形)を息子につけたとさ
れる。しかしながら、現在のところ、問題のウルクの知事やエアンナの管長とナボポラッサルとの親子関係を立証
するものは知られていない。さらに、エアンナの管長を務めるネブカドネツァルに関する最も早い典拠はナボポラ
ッサル時代初頭のものであり、この人物がネブカドネツァル2世であった場合、前562年に没するまで60年以上の長
きにわたり公生活を営んだことになるため、両者の同定には少なからず疑問の余地がある(Streck 1999, 197)。

(7) グレイソンは『ウルク予言』裏面の【王10】および【王11】に関するくだりをウルクの独立を告げる真の予言
と解する。彼によれば、【王2】はエリバ・マルドゥク、【王3-8】(注10参照)はセンナケリブ、【王9】はネブカ
ドネツァル2世にそれぞれ比定される(Grayson 1990, 206-209)。

(8) もっとも、ポリュウが指摘するように(Beaulieu 1993b, 47)、セレウコス朝時代にウルクの祭司により記され
た祭儀文書の奥付は、その文書がナボポラッサルがウルクから「奪った(išluma)」粘土板の内容を写したもので
であると主張する(Linssen 2004, 175 TU 38 r. 46-47)。このようにナボポラッサルを略奪者とする見方がウルク
の町にあったことは、後世のものとして割り引いて考えなければならないものの、『ウルク予言』が好意的に描く
【王10】をナボポラッサルに比定することに、ためらいを感じさせる。

(9) ネブカドネツァル2世によるエアンナの再建は、王がこの神殿の監督と定礎式の準備を命じる手紙の受取人の
名前から判断して、この王の治世でも前半に位置付けられる。Beaulieu 2003, 129-130 参照。

(10) グレイソンは五つの KIMIN を「彼の後に王が現れるが、国に裁きを示さず、国に決定を下さない」という一
節とまったく関連付けず、新しい王が漠然と前任者と同じ数々の行動を取ることを表すものと解する。その結果、
7行bから8行で一人の王(【王3-8】)の登場が予言されていると考える(Grayson 1990, 207)。しかしながら、
そのように具体的な文言を意識しない KIMIN の用例をグレイソンはほかに示していない。

回分を表すのか、あるいは、(3) 5 という数字に大した意味はなく、漠然と多数の反復を表すのか、にある。そこで、三つの見方の得失をそれぞれ見ておきたい。

(1) の五つの KIMIN 全体で「彼の後に王が現れるが、国に裁きを示さず、国に決定を下さない」というくだりを表すと取るのは、前節で紹介したように、ランバートである。この立場の難点は第一に、裏面 8 行で一人の王にしか言及しないとすれば、【王 2】と【王 10】との間に 3 人の王しかいないことになってしまうことである。もう一つの障害は、「彼の後に王が現れるが、国に裁きを示さず、国に決定を下さない」という一節がランバートの考えるように五つの部分に自然に分かれるようには思われないうことである。特に、主語の「王が (*šarru*)」と述語の「現れるが (*illâmma*)」との分割は容易に受け容れ難い。

次に (3) の 5 という数字に意味はなく、「彼の後に王が現れるが、国に裁きを示さず、国に決定を下さない」という文句が何度も繰り返されることを意味するとする見方は、『ウルク予言』の裏面が長期間を対象にしているとする解釈に適合する点で、魅力的である。しかしながら、単に無数の反復を表現するならば、KIMIN が五つである必要はないであろう。実際、裏面 8 行は文字が詰まっておらず、特に SU.BIR^{ki} と TI-qé との間に広い余白を空けて書かれている。もし KIMIN を連ねて同じ文句が何度も繰り返されることを表現するならば、そのような余白を残さず、KIMIN の数をもっと増やしたのではなかろうか。

それでは、残った (2) の五つの KIMIN で「彼の後に王が現れるが、国に裁きを示さず、国に決定を下さない」という文句が 5 回繰り返されることを表す、すなわち、5 人の王の出現が語られているとする立場を取るべきかといえ、これにも困難が伴う。なぜなら、この見方によれば、【王 2】と【王 10】の間には 7 人の王が登場することになるが、前 8 世紀半ばのナブー・シュマ・イシュクンの時代から前 7 世紀末の新バビロニア王朝勃興までの年月について語るには、この人数でも十分ではないからである。⁽¹¹⁾ 確かに、『ウルク予言』は王名表のように歴代王を遺漏なく列挙することを意図したものでなく、途中、重要でない王を省略しているということはある。そして、その省略の仕方次第では、前 8 世紀半ばから 7 世紀末までを 7 人の王によって代表させることも不可能ではない。しかしながら、そのような 7 人の組み合わせとして衆目の一致するものが特にないうこともまた、事実である。⁽¹²⁾

このように『ウルク予言』裏面 8 行の五つの KIMIN を 5 人の王の登場を予言するものと解した場合、彼らの歴史的比定は困難にぶつかる。もっとも、以上の議論はすべて、1969 年に発見された粘土板に記された文章の一字一句までが、新バビロニア時代にこの文書を著した作者の意図を正確に反映していると仮定した上での話である。しかしながら、後述するように、この粘土板は、新バビロニア時代以後の写本である見込みが高く、オリジナルの本文を逐一忠実に再現している保証はない。それゆえ、五つの

(11) ゴルドスタインは、『ウルク予言』裏面 8 行の五つの KIMIN を 5 人の王の出現を表すと解し、【王 2】をエリバ・マルドゥクに結び付けた上で、文書は歴代のバビロニア王を一人も省略せず、取り上げていると考える。その結果、【王 10】は前 8 世紀末のメロダク・バルアダン 2 世に比定される。彼によれば、この王に関する箇所から事後予言でなく、未来の純粋な予言が始まるとされる (Goldstein 1988)。しかしながら、確かにメロダク・バルアダン 2 世はウルクのエアンナ神殿を修復しているものの (Frame 1995, 136-140 B. 6.21.1-2)、それ以外にこの王と【王 10】とを結び付ける要因が乏しいことは否めない。

(12) 例えば、【王 3】から【王 9】を順にナブー・ナツィル (在位前 747-34 年)、ティグラト・ピレセル 3 世、メロダク・バルアダン 2 世、サルゴン 2 世、センナケリブ、エサルハドン、アッシュルバニパルとする 7 人の組み合わせが思い浮かぶが、そうすると、【王 8】に関してバビロニアの富がアッシリアに持ち去られるという『ウルク予言』裏面 8 行末のくだりと、父王が蹂躪したバビロニアの復興に努めたエサルハドンの姿とが重ならないという問題が生じる。

KIMIN が『ウルク予言』の元来の本文になく、むしろ、写本が作成された際に、その筆写者が文書を独自に解釈し、それに合わせて本文に手を加えた結果である可能性も考慮しなければならない。⁽¹³⁾その可能性を探る前に、まずは、この文書を現在に伝える粘土板が記された時期の推定を試みたい。

V. 伝本の出所と年代

冒頭で触れたように、『ウルク予言』が記された粘土板 W 22307/7 は、1969年にウルクでドイツ隊による第27次発掘調査の中、発見された。第26次・第27次調査の報告書によると、この粘土板は、遺跡南東部にある丘の斜面に位置する Ue XVIII 1 区に掘られた試掘溝から出土したとされる。試掘溝の南側の部分に堅穴が見つかり、そこから粘土板ないし、その断片計84点が確認されたという (Schmidt 1972; Hunger 1972)。⁽¹⁴⁾しかし、これら一連の粘土板が出土した正確な地点や層位は報告書の中に記されておらず、現在では不明とされる (Oelsner 1995, 390 n. 16)。

問題の堅穴から発見され、断片の接合の結果、67点を数える文書のうち、⁽¹⁵⁾奥付に所有者や筆者の名を留めるものが17点あり、その中の11点 (Hunger 1976, nos. 28, 31-33, 38, 45, 47, 49-51, 56) がアヌ・イクツル (Anu-ikšur)、2点 (Hunger 1976, nos. 48, 59) がシャマシュ・イッディン (Šamaš-iddin)、1点 (Hunger 1976, no. 43) がリムト・アヌ (Rimūt-Anu) という名の人物に関係していることが分かっている。奥付に見られる肩書や父子関係に関する情報から、彼らはいずれもシャンゲー・ニヌルタ (Šangû-Ninurta) の後裔を称する呪術師の家系の出で、シャマシュ・イッディンがリムト・アヌとアヌ・イクツルの父であることが分かっている。⁽¹⁶⁾このように一連の粘土板文書の奥付に現れる人名の大多数をシャマシュ・イッディンとその二人の息子が占めることから、⁽¹⁷⁾『ウルク予言』を含む、これらの文書は、この家族が所有していたものと判断される。

一家が生きていた年代に関しては、上記の第27次調査で見つかった堅穴から出土したものではないものの、リムト・アヌが筆写したと明記する粘土板の奥付に日付 (ただし、年数や日付を記した箇所は欠損している) の一部として「ダレイオス王 (^mda-ri-ia-a-muš LUGAL)」 (von Weiher 1998, 21 no. 231 r. 45) の文字が見られることが手がかりとなる。ここから、アケメネス朝に3人いるダレイオスという名の王のいずれか一人の治世とその前後の時期に、リムト・アヌら一家が活動していたものと考えられる。⁽¹⁸⁾以上の事情から、『ウルク予言』が記された粘土板は、詳しい時期は分からないものの、アケメネス朝時代に作成された写本であると見るべきであろう。

(13) 予言文書が後世の読者により再解釈され、それに合わせて改訂が加えられたと考えられる事例として、杉江 2014を参照。

(14) このとき発見された粘土板 (断片を含む) はすべて発掘番号に W 22307 を冠する。

(15) 文字の痕跡が確認できない断片 (W 22307/78) を除く、これら文書はすべて Hunger 1976 に収録されている。

(16) シャマシュ・イッディンら家族の系譜や年代に関しては、Frahm 2002, 79-80; Clancier 2009, 52, 58-59 を参照。

(17) シャマシュ・イッディン一家との関係が確認されない人物の名を奥付に載せるものは、Hunger 1976, nos. 39, 69, 84 のみである。さらに、ibid., nos. 60, 72 の奥付は人名の部分が欠損しているものの、シャンゲー・ニヌルタという名の一部や「呪術師 (¹⁰MAŠ.MAŠ)」の文字が残る、これらもシャマシュ・イッディンら家族の一員のものであった公算が高い。

(18) 『ウルク予言』が記された粘土板と同じ堅穴から、ダレイオスの第36年第1月27日という日付をもつ文書が発見されている (Hunger 1976, 92 no. 86 r. 4')。ダレイオスという名で36年も王位にあった王はダレイオス1世 (在位前521-486年) しかおらず、これが同王の治世の最後の年に書かれたことは確かである。しかしながら、当の文書は奥付にバビロンの主神マルドックとザルパニートゥへの言及を含むことから (ibid., 92 no. 86 r. 3'), バビロンで書かれたものと考えられる。それゆえ、この文書が書かれた年代と、後にこれを手に入れたシャマシュ・イッディンら家族の活動時期とを単純に結び付けることはできない。

VI. アケメネス朝時代における受容

『ウルク予言』を今日に伝える粘土板がアケメネス朝時代のものであるとすると、この写本を書き写した人物にとって、五つの KIMIN を含む裏面の内容はどのように読まれたのであろうか。先にウルクから「守護女神」を取り除く【王2】はナブー・シュマ・イシュクンを指すと解したが、アケメネス朝時代の読者が同じ記述をまったく同様に理解したとは限らない。むしろ、より近い過去に生じた女神像の撤去と結び付けられたとしても不思議はない。そこで、ネブカドネツァル2世時代以降、イシュタル像がウルクを離れた事実を探すと、ナボニドスが迫り来るペルシア軍を前に、バビロニア各地の神像をバビロンに集めた出来事が浮上する。この出来事について伝えるバビロニア編年記の箇所は欠損しており、バビロンに持ち込まれた神像の中にウルクのイシュタルの名前を認めることはできない (Grayson⁽¹⁹⁾ 1975, 109-110 Chronicle 7 iii 8-12)。しかし、キュロス2世 (在位前538-30年) によるバビロン占領の直前に年代付けられるエアンナの文書は、その頃、イシュタル像が実際にウルクからバビロンに持ち込まれていたことを物語る (Beaulieu 1993a)。さらに、『ウルク予言』裏面6行に見られる【王2】が「ウルクの民に重い貢納を課し、ウルクを荒廃させる」という記述は、アケメネス朝時代の読者には、ナボニドスがエアンナに「王の役人兼エアンナの監督官 (*ša rēš šarri bēl piqitti* (*ša*) *é-an-na*)」⁽²⁰⁾として官吏を置き、この神殿の資産運用に積極的に介入した事実を思い起こさせたかもしれない。

こうした事実を踏まえると、アケメネス朝時代に『ウルク予言』を読んだ者の目に【王2】はナボニドスとして映った可能性が考えられる。そこから、【王3】から先の王たちをナボニドス以降の王に比定する道が開かれる。その上で、裏面8行の五つの KIMIN が5人の王の出現を表していると考え、【王3】から【王9】までの7人は順にキュロス2世、カンビュセス2世 (在位前529-22年)、ダレイオス1世 (在位前521-486年)、クセルクセス1世 (在位前485-65年)、アルタクセルクセス1世 (在位前464-24年)、ダレイオス2世 (在位前423-05年)、アルタクセルクセス2世 (在位前404-359年) に結び付けられる⁽²¹⁾。そうすると、ウルクから現れる待望の【王10】は、最後のアルタクセルクセス2世の次に即位すると予言されていることになる。

折しも前5世紀のウルクの行政経済文書を精査すると、この町で力を持っていたバビロン由来の氏族が影を潜め、マルドゥクやナブーといったバビロンとの結び付きを示す神名を含む人名が激減する傾向が認められる。その背景として、クセルクセス1世時代にバビロニア北部で度重なるアケメネス朝に対する反乱が鎮圧された結果、反逆に加担したバビロン寄りの勢力がウルクから排除されたものと思われる⁽²²⁾。同時に、その頃からウルクの町ではアヌ神の名前を含む人名が著しく増加する。これは、ウルクでバビロンの政治的な影響が弱まりつつあったのに伴って、宗教・神学の次元でもウル

(19) ナボニドスがバビロニア各地の神像をバビロンに集めたことに関しては、Zawadzki 2012 も参照。

(20) ナボニドスによるエアンナの神殿運営への介入については、Frame 1991; 鶴木 1998を参照。

(21) 王位継承権を争って短期間だけ王位にあったバルディア (在位前522年) およびクセルクセス2世 (在位前424年) と、バビロニアでアケメネス朝に対する反乱の中、推戴されたネブカドネツァル3世 (在位前522年)、同4世 (在位前521年)、ベール・シマンニ (在位前482年)、シャマシュ・エリバ (在位前482年) をここでは歴代王から除外した。実際、ウルクで発見されたセレウコス朝時代の王名表は、カンビュセス2世の後にバルディアやネブカドネツァル3世および同4世を入れず、ダレイオス1世の名を載せる (Grayson 1980, 97 King List 5 13-14)。上記のほかの3名については、該当箇所が欠損しているため、どのように扱われているか分からない。

(22) クセルクセス1世に対してバビロニアで起こった反乱とそれが同地にもたらした影響については、Waerzeggers 2003-04を参照。

クの自立を求めて、従来、バビロニアで優勢であったマルドゥクらバビロンに⁽²³⁾関係する神々に代わり、自分たちの町の神であるアヌに対する崇拜が高揚を見せたものと考えられる。このような前5世紀以降のウルクの状況は、ほかでもない「ウルクの中に現れる」王と彼の王統による世界支配を予言する『ウルク予言』が熱い関心を呼ぶために、格好の条件を整えていたといえるであろう。実際、『ウルク予言』の写本を所有していたアヌ・イクツルら家族の文書の奥付では、アヌとその配偶神アントゥの名が前者をめぐる神学上の思弁を反映する、さまざまな綴りをもって記されており、一家がアヌ神顕揚の運動に関与していたことを示唆する (Frahm 2002, 86-89)。

さらに、前節で、『ウルク予言』の写本を所有していた家族の一員であるリムト・アヌがダレイオスという名の王の治世に生きていたことを確認したが、アルタクセルクセス2世はダレイオス2世の次の王に当たる。それゆえ、現在、我々が手にする『ウルク予言』の写本は、ダレイオス2世の時代とその前後の時期にウルクで活動した呪術師の家族の手により、アルタクセルクセス2世の在世中に書かれたと推測することが可能になる。

そこから、『ウルク予言』裏面8行冒頭の五つのKIMINは、アルタクセルクセス2世時代に、この文書を書き写した人物が【王2】をナボニドスとして数え始めて、待望の【王10】を自分の同時代に出現するものとして読めるように、KIMINの数を調整した結果であるとする筋書きが成り立つ。

VII. 結び

以上の議論を踏まえると、『ウルク予言』の成立、および裏面8行冒頭にKIMINが五つ続く現在の本文を取るに至った経緯について、次のように想定することができるであろう。すなわち、この文書は本来、新バビロニア王国時代初め頃に「ウルクの中に現れ」、イシュタル女神像をこの町に取り戻す【王10】の子(【王11】)のもとで、ウルクの町が世界の覇権を握ることを待望して著された。【王10】と【王11】がナボポラッサルとネブカドネツァル2世だったのか、後者とアメル・マルドゥクだったのか、それとも、まったく別のウルクの名望家の父子を指していたのかは、定かでないが、ともかく、その野望が達せられることはなかった。その後、アケメネス朝時代になり、前5世紀、ウルクの町でバビロンの影響が政治的・社会的にも宗教的にも薄れる中、文書が再び注目を浴び、アルタクセルクセス2世時代に、「ウルクの守護女神」を町から取り去る【王2】をナブー・シュマ・イシュクンからナボニドスに読み替え、ウルクに独立と栄光をもたらす待望の【王10】が現王に代わって、すぐにでも現れると解釈できるよう本文に手が加えられた結果、繰り返し記号KIMINが五つ続くようになった、と。

ただし、ここでアルタクセルクセス2世時代に試みられたと考える『ウルク予言』の再解釈の結果は、史実と合致しない点を少なからず含む。まず、ナボニドス(【王2】)がバビロンに持ち込んだイシュタル女神像は【王10】の登場を待つまでもなく、次のキュロス(【王3】)によってウルクに戻されたと考え

(23) アケメネス朝からセレウコス朝時代にかけてウルクで隆盛を極めるアヌ神崇拜の高まりについては、Beaulieu 1992を参照。ポリュウは『ウルク予言』の中でも特に【王10】が「アヌ神にふさわしい典礼 (*paraš danūtu*) をウルクの中に確立する」(裏面12行)という一節に着目し、これをウルクにアヌのためにレーシュ神殿を造営することに理解を示したであろうアンティオコス1世ソーテール(在位前281-61年)と関連付ける。つまり、ポリュウは『ウルク予言』の基層を、カウフマンに従い、アメル・マルドゥク時代に求めつつも、ウルク出土の写本が伝える現在の形はセレウコス朝時代の改訂の結果であると考え(Beaulieu 1993b)。しかしながら、『ウルク予言』の写本はV節で確認したように、アケメネス朝時代のもので推定されることから、ポリュウの主張は支持し難い。彼自身、認めるとおり、ウルクでアヌ神台頭の動きはすでに前5世紀には始まっていることから、この運動と『ウルク予言』との関係をセレウコス朝時代まで引き下げる必要はないであろう。

えられる。⁽²⁴⁾ また、【王8】は「アッカドの国の所有物をスバルトゥの国へ取っていく」（裏面8行）とされるが、この王に比されるダレイオス2世がそのような挙に出た事実は知られていない。

これらの齟齬は、現存する『ウルク予言』の写本を残した人物が本文に手を加えることを最小限に留めた結果、生じたものとして説明することが可能である。⁽²⁵⁾ 彼にとって『ウルク予言』とは、自分たちの町の未来を告げる神秘の書にほかならず、その本文を安易に改竄することは、はばかれることだったと想像される。しかし、その一方で、文書が示す予言が間もなく実現することを願う彼の期待は、その予言の成就を自分の同時代に位置付けるよう、文書の字句を書き換えた衝動をかき立てたであろう。このような板挟みを解消するために写本作成者に残された、せめてもの手段は、前後に頻出するくだりを繰り返し記号に置き換え、その記号の数を加減することであったと思われる。あるいは、KIMINの連なり自体は、彼が手にした既存の本文にあり、彼はただ、そのKIMINの数を変えた（おそらくは減らした）だけかもしれない。

以上の推論が正しいとすれば、『ウルク予言』は、カウフマンらが考えるように単に在世中の王を擁護する政治宣伝文書でなく、やがて実現する新王朝の樹立を予告する文字どおりの予言書としても読まれていたことになるであろう。

参考文献

- Beaulieu, P.-A. 1992: "Antiquarian Theology in Seleucid Uruk," *Acta Sumerologica* 14, 47-75.
Beaulieu, P.-A. 1993a: "An Episode in the Fall of Babylon to the Persians," *Journal of Near Eastern Studies* 52, 241-261.
Beaulieu, P.-A. 1993b: "The Historical Background of the Uruk Prophecy," in M. E. Cohen et al. (eds.), *The Tablet and the Scroll: Near Eastern Studies in Honor of William W. Hallo*, Bethesda, Md.: CDL Press, 41-52.
Beaulieu, P.-A. 1997: "The Fourth Year of Hostilities in the Land," *Baghdader Mitteilungen* 28, 367-394.
Beaulieu, P.-A. 2003: *The Pantheon of Uruk during the Neo-Babylonian Period*, Cuneiform Monographs 23, Leiden: Styx/Brill.
Clancier, P. 2009: *Les bibliothèques en Babylonie dans la deuxième moitié du I^{er} millénaire av. J.-C.*, Alter Orient und Altes Testament 363, Münster: Ugarit-Verlag.
Cole, S. W. 1994: "The Crimes and Sacrileges of Nabû-šuma-iškun," *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie* 84, 220-252.
Frahm, E. 2002: "Zwischen Tradition und Neuerung: Babylonische Priestergelehrte im achämenidenzeitlichen Uruk," in R. G. Kratz (ed.), *Religion und Religionskontakte im Zeitalter der Achämeniden*, Veröffentlichungen der Wissenschaftlichen Gesellschaft für Theologie 22, Gütersloh: Kaiser/Gütersloher Verlagshaus, 74-108.
Frame, G. 1991: "Nabonidus, Nabû-šarra-ušur, and the Eanna Temple," *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie* 81, 37-86.
Frame, G. 1995: *Rulers of Babylonia: From the Second Dynasty of Isin to the End of Assyrian Domination (1157-612 BC)*,

(24) ウルクのイシュタルの名前は出ないものの、ナボニドスがバビロンに持ち込んだバビロニア各地の神像をキュロスがそれぞれの町に返したことは、Grayson 1975, 110 Chronicle 7 iii 21-22; Schaudig 2001, 553-554 K 2.1 33-34等に報じられている。

(25) 予言の文言が後の歴史的現実合うように手を加えられながらも、それが不徹底に終わった事例として、旧約聖書のミカ書が挙げられる。その4章10節にはエルサレムの住民が「バビロン」に行くことと記されており、これは、新バビロニアの脅威がユダ王国に及び始める前7世紀末以前にさかのぼるものではないであろう。他方、5章4-5節には、イスラエルが「アッシリア」の侵略を退け、逆にこれを支配することが予言される。この「アッシリア」に対する勝利の予言は、アッシリアの脅威が現実のものであったヒゼキヤ王時代（前728-697年）の頃にユダで活動したミカ自身に、あるいは、彼とほぼ同時代の人物に帰される託宣が成就を見ないまま、後の改訂を経ても残されたものと推察される。

(26) 『ウルク予言』の語り手としてフォスター（B. R. Foster apud Longman 1991, 206）は神格化されたウルクの英雄的王ギルガメシュを、ボリュウ（Beaulieu 1993b, 49）はアヌ神をそれぞれ想定する。

- Royal Inscriptions of Mesopotamia, Babylonian Period 2, Toronto: University of Toronto Press.
- Goldstein, J. A. 1988: "The Historical Setting of the Uruk Prophecy," *Journal of Near Eastern Studies* 47, 43-46.
- Grayson, A. K. 1975: *Assyrian and Babylonian Chronicles*, Texts from Cuneiform Sources 5, Locust Valley, N.Y.: Augustin.
- Grayson, A. K. 1980: "Königslisten und Chroniken. B. Akkadisch," in D. O. Edzard (ed.), *Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*, Vol. 6/1-2, Berlin: Walter de Gruyter, 86-135.
- Grayson, A. K. 1990: "The Babylonian Origin of Apocalyptic Literature," *Atti dell'Istituto Veneto di Scienze, Lettere ed Arti. Classe di Scienze Morali e Lettere* 148, 203-218.
- Hunger, H. 1972: "Die Tontafeln der XXVII. Kampagne," in Schmidt et al. 1972, 79-87.
- Hunger, H. 1976: *Spätbabylonische Texte aus Uruk*, Part 1, Ausgrabungen der Deutschen Forschungsgemeinschaft in Uruk-Warka 9, Berlin: Mann.
- Hunger, H., & S. A. Kaufman 1975: "A New Akkadian Prophecy Text," *Journal of the American Oriental Society* 95, 371-375.
- Jursa, M. 2007: "Die Söhne Kudurrus und die Herkunft der neubabylonischen Dynastie," *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 101, 125-136.
- Kessler, K. 2004: "Urukäische Familien versus babylonische Familien," *Allorientalische Forschungen* 31, 237-262.
- Lambert, W. G. 1978: *The Background of Jewish Apocalyptic*, London: Athlone.
- Langdon, S. 1912: *Die neubabylonischen Königsinschriften*, Vorderasiatische Bibliothek 4, Leipzig: Hinrichs.
- Linssen, M. J. H. 2004: *The Cults of Uruk and Babylon: The Temple Ritual Texts as Evidence for Hellenistic Cult Practice*, Cuneiform Monographs 25, Leiden: Styx/Brill.
- Longman, T. 1991: *Fictional Akkadian Autobiography: A Generic and Comparative Study*, Winona Lake, Ind.: Eisenbrauns.
- Oelsner, J. 1995: review of von Weiher 1993, *Orientalische Literaturzeitung* 90, 381-391.
- Schaudig, H. 2001: *Die Inschriften Nabonids von Babylon und Kyros' des Großen samt den in ihrem Umfeld entstandenen Tendenzschriften: Textausgabe und Grammatik*, Alter Orient und Altes Testament 256, Münster: Ugarit-Verlag.
- Schmidt, J. 1972: "Grabung in Ue XVIII 1," in Schmidt et al. 1972, 56.
- Schmidt, J. et al. 1972: *XXVI. und XXVII. vorläufiger Bericht über die von dem Deutschen Archäologischen Institut und der Deutschen Orient-Gesellschaft aus Mitteln der Deutschen Forschungsgemeinschaft unternommenen Ausgrabungen in Uruk-Warka 1968 und 1969*, Abhandlungen der Deutschen Orient-Gesellschaft 16, Berlin: Mann.
- Scurlock, J. 2006: "Whose Truth and Whose Justice? The Uruk and Other Late Akkadian Prophecies re-Visited," in S. W. Holloway (ed.), *Orientalism, Assyriology, and the Bible*, Hebrew Bible Monographs 10, Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 449-467.
- Streck, M. P. 1999: "Nebukadnezar II. A. Historisch. König von Babylon (604-562)," in D. O. Edzard (ed.), *Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*, Vol. 9/3-4, Berlin: Walter de Gruyter, 194-201.
- Waerzeggers, C. 2003-04: "The Babylonian Revolts against Xerxes and the 'End of Archives'," *Archiv für Orientforschung* 50, 150-173.
- Weiher, E. von 1988: *Spätbabylonische Texte aus Uruk*, Part 3, Ausgrabungen der Deutschen Forschungsgemeinschaft in Uruk-Warka 12, Berlin: Mann.
- Weiher, E. von 1993: *Uruk: Spätbabylonische Texte aus dem Planquadrat U 18*, Part 4, Ausgrabungen in Uruk-Warka, Endberichte 12, Mainz: Zabern.
- Weiher, E. von 1998: *Uruk: Spätbabylonische Texte aus dem Planquadrat U 18*, Part 5, Ausgrabungen in Uruk-Warka, Endberichte 13, Mainz: Zabern.
- Zawadzki, S. 2012: "The End of the Neo-Babylonian Empire: New Data Concerning Nabonidus's Order to Send the Statue of Gods to Babylon," *Journal of Near Eastern Studies* 71, 47-51.
- 鶴木元尋 1998: 「ナボニドス治世下のエアンナ神殿における *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* の地位について」『オリエント』41/2, 1-19.
- 杉江拓磨 2014: 「四大帝国の興亡? : 『王朝予言』の再解釈とダニエル書」『聖書学論集』46, 263-280.
- 月本昭男 2010: 『古代メソポタミアの神話と儀礼』岩波書店.